

いじめ問題を通して薬物依存を考える

少し前のことになるが、学校に通う子どもたちの「いじめ問題」で無視できないニュースがあった。「『いじめ被害の友救えず』／中3、硫化水素自殺／川崎」の見出しで、新聞の社会面で報じられた。記事の扱いは、それほど大きくなかったので、関心のない人は読み過ごしたかもしれない。以下のような内容だった▼神奈川県川崎市麻生区の市立中学3年の男子生徒(14)が、友人をいじめから助けられなかったことを悩む内容の遺書を残し、自宅で6月7日に自殺した。警察によると、帰宅した母親(44)がトイレで倒れている男子生徒を発見、病院に搬送されたが間もなく死亡した。トイレにはバケツと薬品の容器が置いてあり、硫化水素による自殺とみられる。死因は薬物による中毒死だった、という▼記事では「市教委は自殺の原因を慎重に調査している」としたが、もし生徒の自殺が報道の通りだとしたら、今時珍しくなんて正義感の強い生徒なんだろうと思う。半面、過剰な責任感はいいとして、いくらなんでも死ぬことはないのに、とも思う。それ以上に、この生徒の死を情緒的な反応で終わらせたくない、出口の見えないいじめ問題で大事なヒントになるのではないかと、この個人的な感想を抱く▼この年代(思春期前半)は大人が考える以上にナイーブな心性が広がり、死と隣り合わせにある時期でもある。個人差はあるにせよイノセンス(無垢)な心情はとても振幅が激しく、内面を無傷で通過し、成長させることは難しいとも言える。だから、ストレートにいじめ問題に立ち向かう子どもがいても不思議ではない。ただ、この生徒のような自殺のケースは例外だろうと思う▼というのも、そこにはいじめ問題の大きな困難が横たわっているからだ。現実にはあり得ないとしても、人間の倫理の究極の在り方からすれば、本来的にはいじめた側の人間が自己処罰としての自殺に至るのなら論理的につじつまが合う。なのに、今回のようにいじめられる側に近い生徒が友を救えなかったと責任を感じて自ら死を選ぶのは理不尽ではないか▼どうやらいじめ問題には、いじめる側が自分たちのいじめの行為によって、いじめられた子どもを自殺させたとしても、自分を深く見つめ直す視線を保ちにくいようだ。死に追いやったという罪の意識を形成しにくく、自分自身に対する深い内省を持ちにくい構造があり、いじめられる側が一方的に割を食うように、追いつめら

れる構造がある▼このように、いじめ問題は一般に論じられるよりも構造が複雑で、これが解決を難しくしている。いじめの力学は、能力でも外見でも何でもいいが、違いを見つけ、それを根拠に差別を構造化していく。人間が持つ、醜悪な本質の表出かもしれない。そうして一人を多数が取り囲ん標的にする。しかし、自分が多数派の中にも安穩としてはられない。いつ、自分が次の標的となるか分からないからだ▼この時期、仲間との結束やきずなはとても重い。ワルであればワルなほど、内部には強固な連帯感が形成される。ましてやいじめられていても、先生に密告するのは屈辱以外の何ものでもない。かつて暴走族の全盛時代にはシンナーが、この結束を補強する道具だった。薬物依存症者は大なり小なり、いじめられた経験を持つ者が多く、癒されない孤立・孤独感を埋め合わせ、心の痛みを酔いによって忘れさせてきた過去を持つ▼覚せい剤などの単純自己使用をいじめ問題と絡めるなら、自分に対する自傷行為そのもので、ほかならない自分自身の精神と肉体を破壊し、挙げ句に犯罪者に仕立て上げるという奇妙な関係がある。この被害者と加害者を同じ人間が体現する構造に、ある種の可能性を見いだせないだろうか。薬物依存症者が演じる矛盾した構造の中に、いじめる側・いじめられる側の心情が一緒に封じ込められていると考えるなら、これまで踏み込めなかった被害・加害の限界を超えられそうな気がするのだが…。

※筆者プロフィール＝市毛勝三（いちげ・かつみ）元地方紙記者。現在はフリージャーナリスト。ダルク支援者の一人で、薬物依存症問題などをテーマに据える。著書に「漂流の果てに」「我ら回復の途上にて」「少年犯罪論」など。コラムは随時掲載します。